

「何やドボンと云ふたんは、仕舞ふた、今見せた五十兩海へ落した、オイ船頭はん濟まんが船を止めてんか、

甚い事をした、今見せた金子を海へ落したんや」

「お客さん無茶な事を云ひなはん、此様な處で船は止められやせんで」

「けども金子を落したんや……」

船中は大騒ぎ、中に氣の利いた男が帆綱を切りますと帆はくるくくと下りました。

「船頭はん彼の金子が無ければ大阪へ歸る事が出来ん、

彼の金子は主人の金子や、仕方が無い此處から海へ陥

つて私は死んで仕舞ふ」

「一寸待ちなはれ」

「放して殺しとくなはれ」

「マア待ちなはれと云ふのに」

「イエどうあつても死にます」

「そんならどうでも死になはるか」

「何卒^{どうぞ}宜敷うお頼み申します」

右の男をフラスコの中へ入れまして詰をして帆綱で縛りまして

「皆はん相濟みまへんが手傳ふて降してあげとくなはれ」

「イヤ宜ろしい、やつとこせい」

(鳴物入り) ヲツトコセイヨオイヤナ ヲ水音)

「イヤ大きに憚りさんだす、イヨ―海の中と云ふもんは氣持ちの宜いもんやな仰山魚が泳いでよるな、木の葉が散てる様な彼れはなんやア蝶か赤いのんが鯛で大きな坊主が来よつた小さい坊主の手を引いてア、蛸や、子供を連れて遊びに行き依るねな、ナンや云ふて依るナニ彼の瓶の中の人形を買ふて呉れ、阿呆云へ人形やないわい人間やぞ、シヤイく瓶に吸ひ附いて依る、そんな事を云ふて居られん金子が有るか知らん、ア、有るく流石は小判や彼處に沈んだア、彼の横に長

「ヘエ」

「そんなら死になはれ」

「そんなら待ちまひようか」

「何を云ふてなはるね、誰方か海へ這入つて取つてあげるお方は有まへんか」

「何處へ落しなはつたんや、私が取つたげます」

「大きに有難うさんで、彼方だす」

「さようか此處は眞水だすか潮水だすか」

「海だすもん潮水に極つてます」

「そんならあきまへん、私は眞水で稽古をしましたので潮水では泳げまへん」

「モン、うだく云ひなはんや」

「モン、先刻のフラスコで海の中へ這入つて取つて來たらどうだす」

「それを忘れてみましたんや」

「貴郎這入りなはれ、皆が手傳ふて降したげます」

い物が光つてる彼れは何やいな、ア、長刀やで銘が刻つてある、ナニ新中納言平知盛の所持、知盛の長刀やがな、序に拾ふて歸のう、ア、手が出んがなア、……眼の前に落ちて有りながら拾へんとは、寶の山に入りながら手を虚しう歸るかイヤ残念な……」

と瓶の中で四股を踏みましたら瓶が岩に當つてピチンと鏗が入つて潮水が這入つて來ましたのでこれは堪らんと腰の矢立を抜いてバンく破ると幾尋^{いくひら}とも知れぬ海の底へ眞逆様にドブン(鳴物千鳥)

ドンと落附きました目を開ますと、空盃浪として暗れ渡り、一天曇りし際も無く、霞に聳へし龍門に、大龍王宮の額を上げ、右に紫雲の廻廊あり、左に火焰の輪塔あり、珊瑚瑪瑙の鎖^{しづ}をつけ、七寶七重の玉垣、金銀散らめく庭の小砂、

「楮は音に聞く龍宮界は龍の都よな」

(鳴物がく) ヲ清涼山のとこの山